

ジェンダー視点による日本サーフィン史の再構成—
1970～1980年代の女性サーファーの経験から

水野 英莉・和光 理奈・來田 享子

Reconstruction of Japanese surfing history from a gender perspective:
From the experience of female surfers in the 1970s and 1980s

Eri MIZUNO, Rina WAKO, Kyoko RAITA

Abstract

This study aims to reconstruct the history of surfing in Japan through the experiences of female surfers in the 1970s and 1980s. While there is little prior research on the history of surfing in Japan, this study clarified one aspect of it from a gender perspective. This achievement was made possible by the narratives of five women in addition to the articles in surfing magazines.

The following three points were obtained as a result of the analysis. First, the change in the image of surfing and women's relationship with surfing: around 1965, the image of surfing was "delinquent" for both men and women, but around 1970, a group of women came with their surfing partners and waited on the beach, and around 1975, women surfing became more common. By 1975, women surfing became more common. However, there was a double standard, with female surfers being blamed for raising children. Secondly, the 1980s was a very competitive time. There were many competitions supported by companies, and surfing became so popular as a fashion that the term "dry surfer" was coined. Female professionals were born one after another, and it was the dawn of a hot era. Third, the spread of women's surfing revealed that competitive surfing was not the only thing that grew in a linear fashion. In surfing magazines, the treatment of women who surfed appeared to be quite limited, but in fact there were magazine publishers who devoted long pages to features, and editors who attempted to treat women equally. Surfing is now recognized as an Olympic sport, but as far as Japan is concerned, there has not been a dramatic increase in the number of female professional surfers, and steady efforts inside and outside the industry have shown that the field is expanding regardless of competition.

The significance of this study lies not only in the fact that it revealed a part of Japanese surfing history, but also in the fact that it showed that many women surfers and those around them have taken over, passed on, and continued to push the boundaries of surfing culture for women over time. It tells us that the reality that seems to never change is another possibility and another way of life. It gives us an opportunity to think about how far gender equality in surfing in Japan has progressed and where the challenges lie.

1. 緒言

本研究は、日本における女性のサーフィン実践に関する歴史社会的な考察を行うものである。サーフィンは、東京2020オリンピック大会に新たに追加されたスポーツ／競技である。この追加の背景には、オリンピック大会における多様性の確保やジェンダー平等の達成をめざして変化する必要性を提言した「アジェンダ2020」をIOCが採択したことがあるものの、様々なスポーツ領域と同様、サーフィンにおいても、女性の存在は言説や史料に限界があることを理由に「語られない領域」として周辺化されてきた。近代以後の日本においては、公的領域に男性、私的領域に女性を位置づけるという固定観念があったからだ。

しかし2000年以降、オーストラリアや米国では、ジェンダー視点からサーフィンの歴史や文化を再構成する研究成果が蓄積されつつある。女性学、女性史、ジェンダー研究、フェミニズム、男性性研究等の文脈で、サーフィンの歴史や文化を、女性を中心にすえてとらえなおそうとする動きが出てきた¹。これらの業績には、アメリカ（カリフォルニアとハワイ）やオーストラリアというサーフィン文化を牽引してきた地域において、活躍した女性が記録されている。

サーフィンは、日本においては、周囲を海に囲まれた環境にありながら後発的なスポーツ文化として位置づけられてきた。したがって、日本を研究対象とする研究は、上述の国際的研究動向に新たな知見を加えることになると考えられる。こうした研究は、歴史の全体像を豊かにするだけでなく、現在および将来にサーフィンをする女性をエンパワーし、このスポーツの多様化を促すための知見を得ることができる点で、重要な意義を有する。

分析の対象は主として1980年代における女性サーファーの経験とする。プロ組織における活動の記録や、雑誌・映像・ウェブサイトなどのメディアにおける表象、聞き取りや参与観察によりデータを取得し、ジェンダー平等と公正の観点から分析・考察する。

なお、本稿で用いるジェンダーという語については、以下のように設定しておきたい。ジェンダーは、もともと性別をあらわす文法用語であるが、フェミニズムではジェンダーを「社会的・文化的な性のありようを指す語」として用いている。つまりジェンダーには、「自然」で、「宿命」で、変更不可能であると考えられてきた性差を、社会的、文化的、歴史的に作られるものだとする仮説が含まれている。ジェンダーは非常に多義的な概念だが、本研究では、性差や性規範についての観念や知識として、また男女間の関係を権力関係という視点から把握するために用いる分析の視点として扱う。すなわち、性差を所与のものとしてせず、社会には人間に性差を見出す知識や諸実践があると考え、それによって人は男女に異なるふるまい方を求められ、権力がその差異に支配関係を付与していく、と考えるものである。したがって、本研究では、スポーツ事象において、不均衡な権力関係にある状態の是正を求める立場から、サーフィンと女性の関わりについて分析を行うこととする。

2. なぜ1970～1980年代の日本のサーフシーンなのか

これまでの先行研究では、主に米豪圏のサーフカルチャーが焦点化され²、女性とサーフィンの歴史についてはまだまだ十分に検討されているとは言えない。一般書においても同様の傾向がある³。そのような中で、プロサーファーでライターのローレン・ヒルが書いた『She surf: The Rise of Female Surfing』は独創的な試みである。日本の女性プロサーファーが一人だけ取り上げられており、彼女（瀬筒良子）のキャリアと日本のサーフィンの歴史が一部わかる。同じように無名の女性サーファーからプロサーファーまで幅広く記録した、キャロリナ・アメル『Surf like a Girl』も、世界各地の女性サーファーだけを掲載した書籍である。ここでは日本の女性を取り上げられていない。日本のサーフィン文化における女性の経験については、散逸的で、断片的な記録しか残されていないのである⁴。

1990年代以降については、拙稿での分析があ

るが⁵、二度目・三度目のブームを迎えたと言われている1970～1980年代以前については、雑誌等のメディアや当時を知る人々に話を聞くことに頼るほかない。日本のサーフィン文化における女性の経験については断片的な記録しか残されていないのである。一般家庭にインターネットが普及した1990年代半ば以前となるので、当時のサーファーたちは雑誌を中心としたメディアを通じてコミュニティを形成しており、雑誌は有益な情報源となる。

サーフンは1960年代に湘南や外房地域を中心に広まり、1960年代中ごろには最初のサーフィンブームがあったと言われている⁶。高度経済成長とアメリカ文化への憧れ、海辺のレジャーへの人気などが背景にある⁷。1970年代末から1980年代にかけて、再度ブームを迎えた⁸。1980年代半ばはバブル景気や、男女雇用機会均等法の施行なども背景にあり、サーフィンをめぐる商業活動も盛んであった。プロ組織が発足し、国内サーキットが開始する。企業がサポートするプロ・アマのコンテストも多くあった。1980年代半ばごろまでには、日本社会において「サーフンは一般化して安定期に入った」⁹時期である。

日本のサーフィン史の中でも1970～1980年代及びそれ以前について、ジェンダー視点での先行研究が極めて少ないという点が第一の理由である。男性のサーファーたちによる自伝的な記録は残されているが、そこから女性サーファーの姿は浮かび上がってこない¹⁰。より詳細で具体的な当該時代を知るには、サーフィン雑誌の検索・閲覧が有力な手段となるので、筆者の知人から借りたり、国会図書館で閲覧をしたりするなどした。概観したところ、掲載されているのは男性プロサーファーが中心で、ときおり女性プロサーファーのインタビューなどが見られるが、水着の女性が華を添えるように登場するほうが目立っている印象である¹¹。プロサーファーの妻を紹介する「水曜日の妻たち」(当時流行したドラマ「金曜日の妻たちへ」のパロディに見える)なるコーナーがあり、サーフィンをしないう女性のインタビューなどもあっ

た¹²。サーファー女性向けファッション誌でも、女性プロサーファーの記事や、女性サーファーがサーフィンをしているシーンはごく一部あるが、読者女性が「サーフィンを教えてください」とサーフィンをする男性とのお付き合いを望むコーナーなどに紙面が割かれている印象である¹³。

上記の例示はいずれも1980年代における表象であるが、1980年代にはいるとプロ・アマを問わず女性サーファーが存在し、コンテストも開かれるようになっていた。そこで、本研究では、これら1980年代の動向の基盤が形成されたと考えられる1970年代にも遡り、検討を行うこととする。これにより、女性が後景化され周縁化されることを問い直す。

3. 方法論とインタビューイの紹介

紙面からは女性がどのようにサーフィンをしてきたのかかがい知ることができないので、当事者の方にインタビューをすることで詳細を明らかにすることが期待できる。本稿で扱うインタビューデータは、1995年4月21日、4月27日、5月10日、5月27日に行った、5名への聞き取りと、その後のフォローアップにもとづいている。すでに知っていた、女性の元プロサーファーの方から、何名か紹介していただき、その方からさらに新しい方を紹介していただき、スノーボールサンプリングの手法となった。聞き取りには、許可を得てICレコーダーを用い、文字起こしを行った。インタビューの日時や場所は、先方の都合に合わせて、喫茶店やレストラン、自営業の店舗前、海辺のテント内などである。時間は1時間～2時間程度要した。インタビュー内容の理解には、筆者自身のサーフィン経験や、これまでの研究調査で得た知識が役立つ場面が多くあった。

インタビューの形式は、半構造化インタビューで、あらかじめ決めておいた共通の質問とともに、そのつど会話の中ででてきた事項について質問をしたり、新たな質問を追加したりしている。話の流れでサーフィンとは関係のな

い話題に飛ぶこともあったし、「ここだけの話」としてデータとして使うことのできない話をしていたりもした。以下に示すのが、原則として共通して質問した項目である。

- ・基本情報（氏名、生年、年齢、出身地、現在と過去サーフィンを始めた時の居住地、家族構成等）
- ・サーフィンについて（サーフィンを始めた場所、サーフィン歴、始めたきっかけ、サーフィンの魅力やその時感じたこと、どのように継続したか、キャリア、スポンサー等）
- ・周囲からの反応（家族、友人等、サーフィン仲間からの反応、女性として何か特別な経験があったと思うか等）
- ・過去と現在について（サーフィンをして一番楽しかったこと／一番つらかったこと、1980年代は女性にとってどのような時代だったか、過去と現在のサーフシーンについて思うこと、賞金等の男女格差について、公平になっていくために何が必要だと思うか）

表1は、インタビューに応じていただいた5名の方の概略である。プライバシーに配慮し、個人が特定されないよう、また内容に影響を及ぼさない範囲で、一部表現を改変している。

以上が本稿で登場する5名の女性サーファーである。サーフィンを始めた時期や地域に差はあるが、それぞれが1970年代末のブーム及び1980年代のサーフシーンを経験してい

る。次章ではこの5人の方の語りを活かすために、できるだけそのままの形で紹介しながら、1970～1980年代の女性サーファーの経験の特徴をとらえていきたい。

4. 結果

(1) サーフィンを始めたきっかけ

5名の方のサーフィン経験は、始めた地域もそれぞれ異なり、キャリアもかなり異なっているが、交際相手の男性がサーフィンを始め、連れていかれたり、興味を持ったりしたことがきっかけになったのはBさんとDさんである。この2人は、後にプロになるほど、サーフィンに夢中になっていく。Aさんについては1965年と5人の中で最も早いので、直接的には1970～1980年代のサーフシーンと重ならない部分もあるのだが、早い時代にサーフィンを始めたAさんの語りがあることで、むしろ後続のサーファーたちとの対比も明確になる。

父が結核ということで、向こうにいるよりも空気がいいって、こっちの病院の院長婦人が父のいいなずけの親友だったもんだから、うまい具合にそこの病院に入れていただいて、その後、母が〇〇（筆者注：東京の地名）からこっちへ引っ越して。サーフィンと巡り合ったのは多分、16ぐらいかな。私、泳げないんですよ。〇〇（筆

表1 インタビューイ—覧

	名前 (仮名)	生年	サーフィン 開始年齢 (年)	サーフィン 開始地域	きっかけと概略
1	Aさん	1949	16歳 1965	関東	父親の病気を機に海辺地域へ引っ越した。20名ほどのサーフィンプラブに、唯一の女性として所属。
2	Bさん	1959	17歳 1976	関東	交際相手がサーフィンを始め、サーフボードとウエットスーツを買い与えられた。26歳のころ、プロに。
3	Cさん	1960	18歳 1978	四国	バイト先の人に連れていってもらって始めた。海辺に移り住み、民宿でアルバイトをしながら、18歳でプロに。
4	Dさん	1960	15、16歳 1975	関東	交際相手に連れていってもらって始めた。プロトライアルを受験し、合格。翌年は夫もプロに。
5	Eさん	1960	18歳 1978	関東	同級生に連れていってもらって始めた。大学卒業後、出版社に就職。

者注：チーム名)というクラブがありましたね、当時。そこへ行って、泳げないから板があればいいやと思って、「すみません。クラブに入れてください」ってお願いしたら、「2000メートル泳げるか」って。泳げるわけないでしょう。何考えてる?と思いついた。それでその日から小学校のプール、潜る練習した。浮いてくるのよね、自然に。何だ、浮くじゃんと思って、それで泳げると思って、私、泳げますということで、入れていただいて。(Aさん)

当時のサーファーたちは集団でクラブを形成し、ほぼ男性からなり、Aさんはこのクラブに唯一の女性として所属していたことから、日本でのサーフィン揺籃期は、女性はかなり少数派であったことがわかる。

そのとき付き合ってた彼氏が、三つ年上で、高校卒業してましたよね。大学生でした。ちょうど、スケートボードとかがはやりだったときで、サーフィンしたいからって言われて。何、サーフィンって、みたいな、なんにも知らなくて。いきなり、板とウエットを買い与えられて、一緒に始めたのがきっかけですね。スケートボードはやってたんですけどね。(Bさん)

初めて海に行ったのは高校3年生の夏休みだったかな。高校3年生の夏休みぐらいだったんだと思う。あまりはっきり覚えてないんですけど。サーフィンっていうのはやってるよって聞いて、サーフィンっていうのはその頃、ミナミのアメリカ村のファッションだったり、海行ってサーフィンすることがつながってるような感じ。ファッション、イコール、サーフィンっていう感じだったのね。はやりの中で、こういうのが今からはやるよみたいな、高校生の中で。アメリカ村に買い物に行ったりとかそんなことをしながら、一回、海にも行

きたいねみたいな感じで連れてってもらったの。(中略)バイト先の人に連れてってもらったと思う。友達と一緒にね。サーフィンしてる人を探してきてくれて。車2台ぐらいかな、なんかで乗せてもらって、連れてってもらって。そのときは女の子がサーフィンしない時代だったんだけど、私はそれが分かってなかったんですね。サーフィンっていうのはするものだから、ただ何となく普通にスポーツする感覚で、スキーやるような感覚で板を、板とウエットを、また連れてってくれた人が貸してくれたんよね、ちゃんと。用意してくれて。(Cさん)

そうですね。地元の先輩と一緒に行ってたんですけど、その先輩が行きつけのショップと一緒にいく。だから必然的に、その時代は、みんなどこかのショップに、行きつけの所に行って、サーフィンする形でしたよね。今みたいに、量販店があつてとか、通販があつてとかじゃないですからね。みんな、どっかのショップにそれぞれ入ってましたよね。(Cさん)

きっかけは大学1年生のときに、サーフィン、はやってたんですよ、その時期めちゃうちゃ。それでサーフィンしたいなと思って、たまたま周りの人がやっていて、同級生ですけど、男の子ばかりだったんだけど、連れていって、連れていってっていうことでサーフィンを始めたっていう、ただそれだけのミーハーなきっかけですね。(Eさん)

最初は高校1年生ぐらいのときに見て、それでしばらくやりたかったんですけど、道具がなくてできなくて、半年ぐらい後に春先から始めたので、まだ15、16ぐらいですね。それからずっとです。(中略)私は東京の下町出身で、全く海とは縁がない、本当に町中だったんですけど。今の主人が

サーフィンをちょうど始めたというか、初心者の頃で、それを見て連れていってもらって。(Dさん)

Aさんと比べて、少しあとの1970年代にサーフィンを始めたBさん、Cさん、Dさん、Eさんは、周囲にサーフィンをする人が身近にあり、当時若者にはやっていたスポーツ、女性にも人気のスポーツとしての位置づけに、サーフィンがあったことがわかる。ただし、いずれも、男性など、車を持っている人、道具を貸してくれる人／買い与えてくれる人がいてこそ始めることができている。

Cさんはその後、関西地域から四国まで自力で行ける方法としてフェリーに乗ってサーフポイントに通っていたが、熱中しすぎて家出同然のようにして四国へと移住し、アルバイト生活を送るようになった。彼女らの語りを聞いていると、海沿いの地域に住む人が近くの海に行きサーフィンをするというより、都市部に居住する流行に敏感な女性たちがサーフィンに目を付けているということがわかる。自家用車等の交通手段がなければ海辺まで頻繁に通うことができないので、Cさんのようにいっそ移住するという行動になるのだろう。

(2) 砂浜で待つか、それとも海に入るか

さきほどのCさんの、「女の子がサーフィンしない時代だったんだけど、私はそれが分かってなかったんですね」という発言に見られるように、興味がある女性は多くても、実際に海に入る女性は多数派ではなかった。当時の女性たちとのサーフィンとの関係や距離感について語ってもらった。

Cさん：すごく楽しかったのよ。多分結構、その頃やっぱり女の子は普通は浜で読書しながら彼氏のバスタオルを持って待ってるっていうのがサーファーガールっていうやつやったらしい。

水野：Cさんはあまり知らず。

Cさん：そう。私の中にはそういうのはな

かったんよね。自分の考え方の中で男の人とか彼女とかを待ってるっていうのがなかった。(中略)後から海行ってみたら結構女の人行ってないやん。みんな砂浜で待ってたわ。でもその前にサーフィンの波に乗ることの楽しさを知ってしまったから、待ってるなんか言えなかったし。

水野：そうですね。一回やったらね、待つっていうことはないですね。

Cさん：そう。自分が楽しむことしか考えてなかったのよ、多分ね。

全然、楽しかったですね。私的には。別に女の子もいたし。でも、女の子たちはやんなかったし、やんないはやんないでいいし、やるはやるでいいし、でもみんなビーチライフが好きだからっていう感じでみんないたから。海に行くっていう行為が楽しかったと思う、その頃は。グループっていうか、いつも海に行くのが楽しいっていうのは、何人ぐらいで、女の子が何人、男の子が何人みたいな、グループみたいなのがあったんですね。(Eさん)

特になんも感じなかったですけど。でも、待ってる子は、偉いなって。こんなにサーフィンばかりしてる彼氏をちゃんと待ってるんだって。でも、逆にいったら、まだ待っててくれる女の子はいいほうじゃないですか。彼氏が海に行くことをすごい拒絶して、なんで遊んでくれないのみたいになっちゃってっていうパターンも、すごく、見てるとあったから¹⁴。一緒に来て、サーフィンしなくても、海を楽しむのであれば同じかなっていう感じは。(Bさん)

CさんとEさんは、周囲の女の子たちが海に来てサーフィンをせず、砂浜で待つのも一般的な光景だったとしつつも、自分自身はサーフィンをやりたかったからやったのだと語る。また、Dさんによると、「砂浜で待つ」女の子たちは、Dさんより、少し年上の女性たちだった

とも言っている。

そっちが（筆者注：砂浜で待つ女の子が多かったです、私たちのときは。（中略）周りの東京から来る彼女ですよ、彼氏の彼女は、みんなすごいすてきな格好して、大学生とかOLさんとかで、お弁当とかお菓子とか作ってきて、キルティングのボードケースを作ってきて、たき火をして待ってるっていう。つまんなと思って。その人たちは私よりちょっと上なわけですね。だから三つか四つぐらい上。すごいカッコいいんですけど、なんかカッコいいなと思って。だけど、これ、つまんなと思って。早く海入りたいわと思って。「早く海入りたい」って言ったたら、「女の子がサーフィンなんかやるの」って、そのお姉さんたちに言われて。なんでやんないんですか、むしろって。ええ、女の子がサーフィンなんてやんないわよねっていう感じで。そうなんだと思って。ふーんと思ったことがありますね。（中略）サーファーガールみたいな確立してたので、怖かったですね、年も上だし。そういう手作りのなんかで彼氏を待つ、毛布でたき火して。（Dさん）

1975年にサーフィンを始めた1960年生まれのDさんの語りからは、1970年代初頭にサーフィンをしていたDさんの3、4歳年上の女性たちが、砂浜でサーファーの彼氏を待つスタイルを作り上げていたことがうかがえる。

（筆者注：自分がサーフィンをすると）見ていましたね、みんな。（中略）それは今、通った（筆者注：インタビューをしているところから見える通りを偶然通りかかった）、ハワイで知り合ったけど、〇〇とか、同じぐらいの年代の、生意気だとするんだよね。嫌な目では見られなかったけど、敵は多かったね。敵っていうか、後で聞いた話よ。口なんか聞かなかったから。ただ、運がいいのは、〇〇（筆者注：チーム名）

のサーフィンにいた一番威張っているやつが、ずっとそばにいてくれたの。（中略）当時、サーフィンやれるというのはボードも買えれば、だからお金持ちしかいなかった。（Aさん）

その当時は、サーファーは不良だと思われていた。だって、着替える所は車のドアかなんかを開けて着替えるし、多分、みんな白い目で、こいつら不良だと思われていたんじゃないかなと思うし。（中略）女の子は結構、お金持ちの子が多かったから。（中略）ハワイから来た女の子もやっていたけど、いわば陸（おか）サーファーが多い。陸サーファーというのは陸にいて、彼氏がやっているところを見ているとか。男の子も陸サーファーが多かったよ。（Aさん）

女性にとっては非常に早い時期、1965年にサーフィンを始めた1949年生まれのAさんが、サーフィンをすると物珍しいものを見るように注目を浴び、敵も多かったと語った時を経て、女性たちとサーフィン、海辺との関わりの変遷が見られ大変興味深い。

女性とサーフィンの経験に注目し、当事者の語り即して見てみると、以下のように要約できる。1965年頃は、男女問わずサーファーに対する「不良イメージ」があり、さらに女性がサーフィンをすると奇異に見られるような雰囲気があった。1970年頃では、サーフィンをする交際相手と一緒に来て砂浜で待つ女性グループがいる。1975年頃になるとサーフィンをする女性がより一般的になる。

（3）周囲の反応

では、彼女らがサーフィンをすることに對し、周囲の反応はどうだったのだろうか。家族や交際相手などからの反応について見ていこう。

水野：ご両親は、サーフィンされることを反対はされませんでしたか。

Aさん：反対はしない。もう勝手にやってくれって。ただ、新聞社は珍しいから、撮りに来るじゃん。そうすると後で聞いた話だけど、父がうれしそうにその新聞を持って、焼き鳥屋さんで「うちの子が出てるよって見せてもらったよ、Aちゃん」って。その当時、Aって名前は珍しいから、すぐ覚えてもらえた。(Aさん)

Bさん：自分的には（筆者注：サーフィンを始めることに抵抗は）なかったですけど、家族にはめっちゃくちゃ反対されましたよね。だから、いつももうそついで、出てましたよね。延々と、それが何年続いたか。やっぱり。危ないからやめなさいって、どれだけ親に反対されたか。

水野：ご家族は、サーフィンがどんなものかっていうのはご存じで。

Bさん：いや。はっきりは、まだその時代は知らなかったかもしれないですね。ただ、海に朝早くに行ってるというのが、危ないと思ったんじゃないですかね。

水野：ご家族の方が、例えば女の子が海に行くこととっていうのは、何か反対されたり。特に。

Eさん：別に、特に。

水野：何も。応援する。

Eさん：応援はないですね。そんなに真っ黒になっちゃってとか、気を付けてよとか、そういう感じですかね。

(筆者注：夫の母親が) また面白くて、すごくフェミニンな人なんですけど。どうぞって言ってるんですけど仕事があんまりやるし、自分のやりたいことを、カラオケをやってるんですけど、追求型なんです。だから……。 (中略) そう。だから人のことにあまり干渉しないっていうか、人が楽しんで、いいじゃないって感じ。そうねみたいなの。でも自分のことに夢中だから。悪く言えば、人のこと、どうでもいいって

いうか、楽しいならどうぞみたいなの。だからやっているとっていうのはありますよね。だけど、その周りの人とかは、そんな年がら年中、真っ黒でとか、朝から海行ってとか言われたりしましたが、でも、そのとおりですみたいなの。そうすみたいなの感じ、そうすって。本当にそこは反論しないし。別にそのとおりなので、そうすみたいなの。でも、それを阻害するようなものはなかったから、それなりにですかね。(Dさん)

陰では喜んでいたAさんの父親、反対するBさんの家族、特に賛成も反対もしないEさんの家族、それからさらに、Dさんの語りを見ると、「真っ黒」になってと日焼けのし過ぎを気にする周囲の人がいることがわかる。では、身近な男性たちの反応はどうだったのだろうか。

(中略) 私より2、3個は上の。私が例えば高校生のときに大学生とかで、ちょっと上の世代は全く、メンズも女の人もそういう感覚だったんじゃないですかね。うちの旦那はそういう感覚は全くなくて、やればみたいな感じ。でも道具が現実的にないから、高いじゃないですか。買えないよと思って。じゃあ誰か探すからって行ったら、そういうのに理解ある男の人がいて、「Dが始めるんだったらあげるよ」って言われて、いいの？、頑張んなよ、女の子少ないからみたいな感じで、頑張るみたいな。楽勝とか言って、全然、楽勝じゃなかった。(Dさん)

Dさんの語りからは、男性たちからの女性がサーフィンすることへのまなざしの変化も見て取ることができる。サーフィンをするきっかけのところでも見てきたように、Dさん世代は、サーフィンを始めるにあたっては、比較的周囲の男性からのサポートが得られやすい状況にあったとも言える。ただし、次に示す、60年代という早い時期に始めたAさんの話からは、女

性にとって困難な状況もあったことが垣間見える。

Aさん：女の方は大会やると、7人ぐらい出していたかな。(中略) ジャッジがいて、その頃はショートボードがなかったから、ライディングとかそんなことよりも、何回乗って、きれいな乗り方もあるみたいな。ジャッジが見たりして、乗っちゃあまた戻ってっていうことをしていたのかな。若いから、当時、ウエットスーツなんかないから、ビキニでボードを頭の上に乗つけて海まで来るから、男の人の目がね。分かる？

水野：はい。注目を浴びますね。

Aさん：注目というよりも、なんかやばいと思うのよ。大会なんか行くと、お金がないからユースホテルに泊まるでしょう。女子は私だけだから、男子は上にいるの。なんか白い物がツルツルと下りてきたら、仲間が「上へ来い」と言うのよ。人数数えるわけ。13名、やばいと思って、それで上に行かないようにして。そんなことがあって、これは誰か町の名手じゃなくても、誰か気が合ったやつを探さなくちゃいけないなと思って、本当にそんな感じで。

Aさんの「やばい」は、13名の男性がいる部屋に、女性1人で呼びだされれば、万が一性犯罪が起きても抵抗できない可能性があるという危機感だと解釈する。もしこの呼び出しが犯罪を意図したものでないとしても、Aさんに恐怖を抱かせるに十分だった。Aさんは難を逃れたが、女性にとってはただサーフィンをするということが難しい場合があることが伝わってくるエピソードである。Aさんを若い女性として、性的な消費・搾取対象として見る男性サーファーたちから守る、仲間の男性が必要だったのである。

(4) コンテスト出場

さて、Aさんはコンテストへの出場経験につ

いて語っていたが、サーフィンに没頭していた彼女たちは、みな共通してアマチュアのコンテストに出場し、プロになった人もいる。

水野：周りに、女の子はサーフィンしてましたか。

Bさん：いや、いなかったですけど。サーフィン始めて、一緒に波乗りを教えてもらった先輩が試合に出てたから、始めてすぐに一緒に試合に出されちゃってて。テイクオフするのがやっとなのに、試合に出てたので。何となく、試合の会場に行くのと、何人か女の子に会うような感じでしたね。普通にサーフィンしてたら、まず見掛けなかったですよ、やっぱり。

試合に行くと、女の子がヒートがないから、男の子のヒートに交ざって入れられてたから。でも、試合に出ると、女で頑張ったって言って、なんか賞品もらえるから、うれしかったかなみたいな。

(Dさん)

Cさん：〇〇(組織名)ができて、〇〇っていうのがあって、そこでレディースクラスっていうのもできたのよね。ちょうどその当時ぐらいですね。(中略) あれだから80年頃になるのかな。

水野：女の子もそれなりに人数がいたんですね。

Cさん：初めての大会で6人、1ヒート6人で、3ヒートぐらいあったのかな

水野：そうですか。

Cさん：それなりに人数は最初の大会では十何人が集まったと思うよ。

女の子かわいかったんですよ、あの時代。今、怖いでしょ、女の子。サーフィンしてる。かわいかったんですよ。だからパルコとかそういうところがスポンサーになって、パルコって今、落ちぶれた百貨店ですけど、パルコレディースとか、そういう特別

な女の子のための大会みたいのがあって、それだったら出たいなと思って、そういうのに出たりはしましたけどね、何回かは。だから、その時代に一緒に大会に出ていた、一緒についていか大会に出ていた人が初代のプロサーファーになったりとか、あそこで会った子だみたいなの、そういう感じですかね。(Eさん)

サーフィンにある程度熱心に関わった女性たちが、コンテストに出場し、そこでまた新たな仲間たちに出会う様子が語られる。さらに下のEさんの語りからは、フレッシュで、喜びや驚きに満ちた興奮が伝わってくる。少し長くなるが、引用する。

Eさん：道もなかったし不便だったので。どのぐらいかかったのかな、当時、東京まで帰るの。車だと3時間とか4時間とか普通にかかって、高速もないので。だから本当に遠い所だったんですけど、どこで見たんだっけな。どっかで。どこで見たんだっけ。女の人がサーフィンしてるの初めて。違う。そのときに、初めてではないんですけど、2回目ぐらいに〇〇ちゃんと試合で、試合だったんですよ。いたと思って。(中略)面白いことについていうか、その翌年に全日本の支部予選があって、また会って、私が優勝して〇〇ちゃんが2番か3番だったんですよ。全日本に行けることになって頑張ろうねみたいな感じで。〇〇ちゃんも他にそんなに知らなくてっていうか、すごいよね、みんなっていう話をして。別々の車で行ってるんですけど、たまたま会うんですよ、デニーズで、途中の。それでいろんな話とかするようになって。そのときドルフィン(筆者注：大きな波を板と一緒に波の下を潜って越えていく方法)も知らなかったんです、私たち全員。全日本、当然、負けて、おそば屋さんで、これからはドルフィンだよって。訳の分からない、これからはドルフィンだっていう。

水野：大きな波にいけるようになりますもんね。

Eさん：これからはドルフィンだって。リップだとか、カットバックだとかじゃなくて、ドルフィンだよって。メンズも含めてドルフィンだって盛り上がって、練習しよう、帰ってって言って。〇〇ちゃんは、私、Eちゃんのコーチになるからさって。四つ違うんです、〇〇ちゃんと。〇〇ちゃんとうちの主人が同い年なので、コーチになるからって。コーチじゃなくて頑張ろうよっていう話。本当にそういう時代だったので。

この語りの面白さは、大会という場は、本来サーフィンのパフォーマンス(技)を競う場であるのに、パフォーマンス以前のドルフィン(ドルフィンスルー)が大事だと選手たちが発見し、盛り上がっているからだ。全日本という全国大会レベルのコンテストに初めて参加し、自らのレベルに初めて向き合った初々しいストーリーである。こうしてサーフィンの魅力にひきつけられていく彼女たちの生活は、文字通りサーフィン一色になる。

プロは26でなったんですけど。波乗り、まず高校生で始めて。高校の夏休みはほとんど海に通ってる感じで。でも、取りあえず高校生で、学校を休んで海に行くっていう感覚はまだなかったの。よく分かってなくて。でも、高校、進学とか進路を決めるに当たって、波乗りするためにはどうしたらいいかって、まず考えて。取りあえず、学校に行くのがいいかなみたいな。働くよりも学校行ってたほうが、サーフィンではできるだろうとか。じゃあ、学校が海のほうであればいいんだって。すごく単純に。(Bさん)

Bさんはその後、保育士と幼稚園教諭の免許を取り、保育園に通いながら試合に出る。しかし、働きながら練習が思うようにできないた

め、「湘南に住んでる子たちに負けちゃうのが悔しく」、仕事前に台風が来ていると、朝2時に起きて海に向かい、6時までサーフィンをして、そのまま保育園で仕事をしていた。しかし、無理がたたり、過労で身体を壊してしまう。そこで実家の家業を手伝いながら、サーフィンに専念し、再び試合復帰をする。

試合復帰して、全日本で、一応6位だったんですけど。その頃は、6人でファイナルだったんで、ファイナリストにはなれて。次の年に、もう一度、全日本にチャレンジして、本選まで行けたんですけど。それが〇〇（筆者注：地名）の試合だったんですけど。イチコケして、すごく悔しくて。でも、こういう生活を続けてってどうなのかなって思って考えたりしながら。ちょっと1回、自分でもけじめをつけたほうがいいから、プロトリアルを受けてみようかなみたいな、簡単な気持ちで。でも、それもすごい不純な考え方で。ここの間に、サーフィンをさせてくれた彼氏と、もう別れちゃったんですね、ハワイから帰ってきて。その彼氏はプロになっちゃって、私と別れてから。全日本で2連勝して、アマチュアで。で、プロになっちゃったんですよ。なんかそれも悔しくて。ちきしょう、私だってみたいのがあったので。私もちょっと試験を受けてみて、どうなるかでその先、考えようと思ったら、受かっちゃって、一発で。受かっちゃったなら、プロになっちゃおうかなみたいな。何をやるにも、簡単過ぎる、もう。（Bさん）

80年代が一番、良かったんじゃないかと思えます。変でしょ。80年、90年ぐらいが一番、良かったんじゃないかな。そこはすごいコンテストがはやったから、ギャラリーもいっぱいいたし。日本国内でもね。今はいないもんね。JPSA（著者注：日本プロサーフィン連盟）の大会といっても。ライブで見れるし。（Eさん）

試合復帰したBさんは、全日本に支部の代表として出場する。当時の全日本のショートボード、レディースのカテゴリーには、6人が出場し、1ヒートのみ（初戦が決勝戦）であったことがわかる。しかし翌年にイチコケ（初戦敗退）したことと、交際相手と別れたことから、思い切ってプロトリアルへの挑戦となった。そこで見事合格、プロの仲間入りを果たす。Bさんはその思いつきともいえる行動を「簡単すぎる」と表現している。

全日本における女性のカテゴリー参加の人数は少ないが、だからこそ多くの女性にコンテストでの出場・勝利のチャンスがあったのかもしれない。複数のインタビュアーが言及していたのが、1980年代半ばは、丸井のスポンサーによるコンテストが開催され、コンテストの様子がテレビ中継されていた点である。陸サーファーなる言葉が生まれるほどファッションとしてもサーフインは流行し、女性のプロが次々と誕生、熱い時代の幕開けだった。

（5）プロへの道

1980年代はサーフィンが大変盛り上がり、女性もその勢いに乗っていったのは確かだが、複数のインタビュアーが女子の試合や女子の扱いは「おまけ」だったと語っている。

アマチュアは結構おまけ的な。だから、一発、女子のヒートがあっても、一発ファイナルだから、ファイナルに出れば賞品ももらえるじゃないですか。ごっそり賞品もらって、もうかったみたいな気分になって。それでウエットとかもらって、ウエット買わなくても着れるぞみたいなのもあったし。結構、アマチュアで試合に出たときのほうが、正直、プロになってからよりも、恵まれてましたよね。賞品がすごい良かったのが。

プロになっちゃったら、何にもなくなっちゃって、お金払う一方で。つらいなと思ったし。プラス、男の人の中に入れさせてやってるんだよ。おまえらは邪魔なんだ

よみたいな、取りあえずいるんだよみたい
に、本当に邪険に扱われてきたから。プロ
になってからの女子っていうのは、立場的
にはすごく弱かったですね。だから、シー
ド選手とか決めるんで行っても、「おまえ
らなんかどうでもいいじゃん。おまえなん
かのサーフィンなんか、大したことないん
だから」みたいなこと言われたりとか。そ
れはすごくプロになってから感じたこと
です。ね。女ってサーフィンしちゃいけない
の？みたいなの。

(中略) やっぱり最初は、おまけから始ま
り、おまけだけど面倒くさいんだよみたい
なところに来て、何となく一緒に交わる
ようになってきて、やっと認められてきて
るのかなっていうことですかね。やっぱ
り、順を追って、すごい年数かかってる
んだなって思いますよね。(Bさん)

Bさんは、プロになってからはシビアだ
ったと語り、状況がよくなるのには年数
がかかっていることを指摘する。確かに、
数年先にプロになったCさんの場合は、
女子は「お荷物」扱いだったと言ってい
る。

なんかやっぱり私たちのときは結局お
荷物だったのよ。JPSAっていうのは男
の人主体の大会で、取りあえず、はやっ
ているらしい。女の子も増えてきたし
っていうところで、つくってもいいん
じゃない、飾りでみたいな感じでレ
ディースクラスが最初つくってもら
った。つくってくれたときでも、つく
ってくれてもやっぱりお荷物的な感
じはすごくしたよね、自分らでも。や
ってやってんだぞみたいな感じで。波
の状況の悪いときにレディースがあ
ったりとかそういうのもあったよね。
今は結構選手の意見も聞いてもらえ
るようになったみたいではあるけど。
(Cさん)

このような状況に対し、Dさんは女子選
手たちが不満を選手会に持ち込もうと
した動きが

あったと話してくれた。少し長い
がDさんの語りを引用する。

そうですね。私はでも、(著者注:男子
と女子の待遇の違いがあることが)そ
うかなっていう納得の範囲だったん
だけど、あるときに稲村で、稲村クラ
シック、この間、20年ぶりでしたっ
け、やったの。稲村クラシックが始
まったときに、レディースはないよ
って言われたことで、ある女子の選
手はみんな、なんでメンズがあっ
てレディースがないんだっていう不
満を選手会に持ち込もうよって。ま
ずレディースだけで話し合いをしま
しょうってことになったことがある
んですね。

ただ、いろんな意見があって、レ
ディースもあるべきだっていう意見
の人たちは、男女、なんで差があ
るのっていうことを、自分たちが
もっとアピールをしたいって、大
きい波だで行けるのっていうのが
趣旨なんですけど。でも、その時
に選手会長がいろんな意見を全
部拾ってくれた中で、私は大きい
波、行ける・行けないということ
じゃなくて、そこは大事にして、
そこをステータスとしてやって
きたローカルの人たちとか男の
人たちが、先駆者がいて、そこ
をまず尊重してからの、そこに
なんで女が入るのっていう理由
があるならば、それは、そこを、
むきになってやらなくてもいい
んじゃないかと。別枠で頑張ら
ばいいじゃないと、稲村クラシ
ック、メンズしかやらないよ
っていうんだったら。

なんでかっていうと、そこに戦
えるだけの、大きい波、行ける
かもしれないけど、それでパ
フォーマンスして観客を集めら
れるレベルが自分たちにあるの
かなっていうところも絶対的な
自信はなかったし、男の人と
同等という意味でいったら。例
えば8フィートになるかもしれ
ないし10フィートになるかも
しれない。それを、それでも
同等にテイクオフできないとか、
例えばワイブアウトばかりとか
じゃ、それもねって

いう話だし。それが同等にできるのかって問われたら、そこはイエスって言い切れないところが私にはあるから、別にそれで、別になってわけじゃないけど、そこには絶対的には賛同しないかなっていう。二つに意見が分かれてて。結局、その年も稲村はなかったのかな。そういうことがありましたね、一回。そういう話し合いを、ディスカッションをしたことが。

(中略)ガールズだってこれだけできるってことを見せつけようよ、見せようよっていう気概は分かるんだけど、でも実際にそれが予想を上回るサイズになったときでも、男の人は絶対それをパフォーマンスするし。だけど、それが同等にできるのかなって思ったときに、そのレベルでは私、乗れるかもしれないけどっていうところですよ。乗るけど、どうなのっていう。点数になるのか、それはっていうところを考えると、どうなのかなって。だから、それは自分と向き合う時間にもなったし、みんながそれぞれに。(Dさん)

このようにDさん自身は、稲村クラシックという大きな波でだけ開催される(約40年の間に過去4回しか開催がない)大会に、レディース枠がないこと、待遇差があることに、男女の能力差があるという理由で納得はしていたが、女子選手のなかには、メンズしか枠のないこと自体に、あるいは男子並みに挑戦したいと、異議申し立てをする人がいた。現在までのところ稲村クラシックに女子の枠は設定されていない。しかし同時にDさんは、昔よりは女性プロサーファーのステータスは上がってきて、男女関係なくというよりむしろ「それぞれのカテゴリーでそれぞれの魅力」が確立されてきたと考えていた。

さて、女性たちに聞き取りをされていて、もうひとつ共通して語られていたのは、サーフィンを続けるなかで経験した仕事、結婚、子育てについてである。Cさんはプロとなって1年活動後、長女を出産し引退している。日本のプロ制

度は登録制で、サーキットをまわっていなくても、登録更新をすればプロとして登録されが、Cさん自身は「大会に出てこそプロ」と考え更新しなかった。出産とともに引退することで、子育てに専念するという意思をもってけじめをつけたのだろう。しかし周囲の人は、引退こそすれサーフィン自体は続けたCさんとは違う考えだったようだ。

Cさん:女の子だから嫌っていうか、どうなんやろうね。でも女の子っていうか、やっぱりサーフィン続けていくのはなかなか難しいなっていうのはあったよね。子どもが生まれたときに、子どもが生まれた時点で私はサーフィン辞めようと思ってたの。それが当たり前やと思ってたの、その時代では。そんなん言ったら仕事じゃなくなってるし、サーフィン趣味みたいなものと子どもの育てていくこと両立できないと思ってたんで。周りも許してくれるような感じじゃなかった、当時はね。だからサーフィンやってる人からも海入ることに関して良くないよみたいなお叱りを受けることもあったから。

(中略)

Cさん:何してるのって、人に子ども預けて海入るなんてっていうことは言われた。それは男の人から言われたこともあるし、女の人の方が強かった。そういうことをよく言われた。

水野:それは子育てしてない人に言われるんですか。

Cさん:いや、子育てしてる人から言われたね。女であるべきことみたいな。

水野:でもその方も海に入ってるんですよ。

Cさん:入ってない。入ってない。

水野:入ってない人に。

Cさん:でもそういうことを言う人は海入ってなくて、浜辺で本読みながらバスタオル持って待ってた女の子たちみたいな人たちに言われた。実際。でも子ども生まれ

て入ったときもやっぱりちょっとその頃にしたら、えっていう感じやったみたいよ。入っちゃうのみたいな。子どももいてるよみたいな。その頃はやっぱり男女平等ではないよね、その頃は。

水野：そういう言葉に、めげずにいられたのはなんですか。

Cさん：気にしてなかった。気にしてないというか私の生き方やと思ってたから。

BさんとDさんはプロ生活を続けたが、子育てと両立の忙しい日々を振り返った。

最初、生まれたときってというのは、自分もまだやりたい、あわよくば復帰しようぐらいに思ってたので、うわあ、しんどいなっていう。子育てってというのはものすごく、こんなに大変なことだったのかっていう現実が、がつんと来て、とてもサーフィンなんかする余裕がなくて、気持ちの余裕もなくて。その頃、おばあちゃんたちと一緒に住んでないので、2人なんですね。家も買ったばかりだし、仕事もまだまだ軌道に乗ってても人も雇用してたので、本当、ハードで。営業にも、もちろん行けなくなってしまって、これは形態を変えなきゃいけないんじゃないかなって思い、ちょっとずつお店を始めたというのもあるんです。それで卸の縮小をしていくんですが、本当に生まれたときってというのは、一緒に海入れればいいなみたいな、月並みな感じだったんですけど、それってすごく果てしないような気がしてて。(Dさん)

Cさんのほうが、時代が前だからね。私はそこまではないけど(筆者注：周りにサーフィンなんてと言われたりすること)。やっぱり子どもが学校から帰ってくるまでには家に帰んなきゃとか、すごいダッシュで、必死ではありましたよね。家のこと、ワッと片付けて、子どもが行った瞬間に出るぞみたいな。バーツとってバーツと帰っ

てこなきゃなんないって。まだ2年生なので、帰ってくるのが早いから、行ってから帰ってくるまでの時間が本当、限られてるから。(Bさん)

Cさん、Bさん、Dさんは3人ともプロとして活動し、結婚・出産・子育てを経験している。プロ活動を継続したかどうかの違いはあるが、共通するのは、子育てとの両立が容易ではなかったこと、それでもサーフィンをやめるという選択はしなかったことである。また、彼女らのパートナーもみなサーファーである。サーフィンをしない人との結婚はEさん曰く「やっぱり環境がなかったら無理だし、結婚して旦那さんがサーフィンをしてなかったら圧倒的に無理だし。女の人の場合ね。男子は全然できるけど、女子がサーフィンをしていてサーフィンしてない男子と出会ったとしたら、私サーフィンするからって絶対、言えないっていうか」である。

Eさんは、コンテストにいくつか参加したが、競技の世界には入らず、大学卒業後に出版社に就職する。たった一人の女性社員だったEさんは、「コーヒーのEちゃん」と呼ばれ、「お茶くみ」をする。当時あった、草の根的に本を配る配本というシステムでサーフショップなどに本を配るのは、とても楽しかったというが、同時にそこでEさんが直面するのは、排他的な世界だった。

(著者注：都市部で作った雑誌を海沿いで配っても)「おめえのこの本なんかいらねえよ」とか言われたりとか、私、女でしょ。ああそうですかみたいな。本当に頭きたよ、あの時代のおっさんたち。早く死んでしまえと思ってたけど、今も生きてるけどね。でも本当に嫌なやつらだったけど。ミーハー雑誌とか言われたりとか。すいません、雑誌の話になっちゃう。思い出してきたらだんだんむかついてきた。(中略)すごいクローズな世界だったよ、サーフィンは。だから本当にサーフィンをしてるっ

ていうだけでローカリズム的な、みんな、俺たちのサーフィンみたいな感じ。よそから来た人はサーファーじゃないじゃんみたいな。(中略) だから本、配ってても、帰れて言われる。おまえ女だろみたいな。本当に。すごい世界だったな。忘れてた。そういうところは、女が股広げてサーフィンしてんじゃねえよとかさ。女が、女がっていう。思い出してきた。(中略) だから、サーフィンする女の子っていうのを認めてない男の人はいっぱいいたよね。思い出してきた。でも、今は全然そんなことないでしょ。(Eさん)

Eさんはインタビューの最初のほうでは、あまり女性としての苦労はしてないですよと話していたのが、時間が経つにつれ上記のようなエピソードを思い出した。そうした露骨な女性差別・女性嫌悪がまかり通るような環境の中でも、Eさんの勤める雑誌社は正しいことをバランスよく伝えようとする心があつたとEさんは語る。業界やスポンサー、ローカルサーファーの都合にコントロールされることなく、男女を平等に紹介した。そして徐々に売り上げを伸ばし、他の雑誌が廃刊していく中で一番長く続いたという。Eさんの活躍を知るDさんはこう語る。

ちょうど私、デビューした年に女性を初めて取り上げてくれて、10ページぐらいで、特集で、初めてなんですって言って。一人一人を、インタビューを一緒に行きながら、カメラマンさんと。(中略)私、本当に新人だったので、白黒の最後のほうのページなんですけど、初めてのレディースの取材、特集で。その取材をしたのも女性の、当時、Eちゃんが初めての特集の、独立した仕事で、担当がたまたま私だったんです。一緒に初めてで、よろしくお願ひしますみたいな。新人同士みたいな感じで。だから、すごくそれは覚えてますね。だって1人1ページか2ページももらえてないで

すよね。初めてだったんですって。そこからレディースがJPSAできて何年かしたときだったので、そこから少しずつ増えていくところだったんですね。(Dさん)

Eさんはその後、ボディボード雑誌の編集長を務め、多くの女性に影響を与えていく。ボディボードをするのは圧倒的に女性の方が多かったからだ。筆者自身も、この雑誌を購入した熱心な読者だったため、ブームの熱気と、そのブームを作りだすのに重要な一端を担ったこの雑誌の影響力を記憶している。

(6) 後続を育てる

前節のEさんの仕事が、あとに続く女性サーファーたちの道標となり、すそ野を広げる役割を果たしたように、インタビューに答えた女性たちはそれぞれに若手をサポートする働きをしている。自身が一線から退いたのち、サーフィンを始めた自分の子どもたちに対してであったり、より幅広い活動を通じてであったりする。Cさん、Bさん、Dさんは3人ともプロとして活動し、結婚・出産・子育てを経験したが、それぞれの子どもたちがサーファーになり、プロとして活動する選手もいる。

Bさんは、幅広い年齢層の人たち海で楽しく遊ぶ体験を提供する活動をボランティアで行っている。サーフィン体験のみならず、一年を通じてスポーツをしたり体操をしたり、環境保護について学ぶ機会を提供する団体である。小学校への出前授業なども行い、地域とのつながりを築き上げることをも重視している。Bさんは、家事や介護、サーフィンや家族との時間を持ちながらも、時間がある限りこの活動に協力しているのである。

自分はサーフィン好きだし、自分がサーフィンしてるだけじゃあ駄目だよなって。やってきたことの証しをなんか残したいなっていうのがあって、私も、いろんな人にサーフィンを理解してもらいたっていうのから、ドジさんと一緒に今はやってる

んですけど。やっぱ、何かしらそういう、自分の生きてきた好きなもの、残したいなとは思いますがね。(Bさん)

Dさんは子どもが小学校4年生くらいの時に、子ども向けのサーフィン大会に子どもたちを連れていった。中学生くらいに本格的に競技としてサポートし始めようとしたが、当時は子どもたちが「すごい嫌だった」そうだ。高校生くらいになると子どもたちの方が真剣に取り組むようになる。

でも本人が本当にインチャージし出したのは高校生くらいですかね。なんで早くもつとやってくんなかったのって。言ったけど、おまえがやらなかったんだよみたいな。30分入っては穴掘ってたでしょうよみたいな。本当に頼むわみたいな。(Dさん)

Dさんはキッズのサーフィンの世界を垣間見て、親たちが子どもたちを懸命にサポートしている様子に「こんなことになってるのか」と思いつつ入っていったが、塾や稽古ごとをさせたり、大学に4年間行かせたりすることを考えれば、「そうでもないかな」と思ったと語っている。

日本のプロサーファーを育成するシステムや、選手へのサポートなどが話題にのぼった時に、インタビューイーの4名の方が共通して言及したある1人の女性、Fさんがいる。Fさんは、海外在住の元プロサーファーで、自分の子のプロ活動を支え、またFさんの居住地域で開かれる大会等に日本から訪れる若いサーファーたちの面倒も見に来てきている人だ。

Fちゃんが日本ですごいサポートしてるから素晴らしいなと思ってるんだけど、あの子のおかげで日本人の若い子どもたちがすごい試合とかサポートしてもらって。親御さんもそんなずっと、いつも付いて行かれへんやん。そこで、〇〇(著者注:地域名)に行ったときはFちゃんがサポートして試

合なんかも連れて行って、あちこちの試合連れて行ってるし。(中略)自分の子どもの面倒見ると、本当、他人の子どもまで面倒見切れないよ。(中略)それで海外の試合に行ったら英語でね。全て進むわけよ。(中略)そうやってね、Fちゃんが世界の扉を開けてあげてる子も誕生してって。その辺が、だから過酷な中でそうやってケアしていく人たちがあっていいなと思ってるの。(中略)だからやっぱりみんな、何か今までやってきたことを後につなげられるように残していったらと思うやんか。自分の利益だけの追求では、そこまで人を見られないもんね。特殊な世界やから多分そうやって手伝いたいというか、あと残していきたいというのがあるんやろうと思う。(Bさん)

Bさんはこのように語り、私利私欲でなく後進の育成に貢献するFさんや、Gさん(プロサーファーで、いち早く海外でサーキットを周った経験を持ち、子どもの育成を熱心に行っている)の活動について語った。それぞれの女性たちは、自身でサーフィンをすることを通じて日本のサーフシーンのボーダーを押し広げた人たちであるが、現在も若いサーファーたちのために新しいドアを開き、日本のサーフィン界に貢献し続けていた。

4. 考察

最後に本研究により得られた結果を示していく。一つ目は、サーフィンに対するイメージと女性のサーフィンとの関わりについてである。1965年頃は、男女問わずサーファーに対する「不良イメージ」があり、さらに女性がサーフィンをすると奇異に見られるような雰囲気があった。1970年頃では、サーフィンをする交際相手と一緒に来て砂浜で待つ女性グループがいる。1975年頃になるとサーフィンをする女性がより一般的になる。しかし、子育て中の女性サーファーが非難されるなど、ダブルスタンダード

があった。

二つ目は、1980年代は非常にコンペティティブな時代であったことについて。企業のサポートによって大会数も多く、陸サーファーなる言葉が生まれるほどファッションとしてもサーフインは流行した。女性のプロも次々と誕生、熱い時代の幕開けだった。

三つ目は、女性のサーフインの広がりや、競技サーフィンだけが直線的に成長したのではないことについて。雑誌を見てみると、サーフィンをする女性の扱いはかなり限定的に見えたが、実際は長いページを割いて特集を組む雑誌社や、女性も同等に扱おうとする編集者たちの試みなどがあったことがわかった。サーフインは現代ではオリンピック競技として採用されるなど、認知されるようになったが、日本を見る限り、女性のプロサーファーが飛躍的に増えているわけではなく、業界の内外の地道な取り組みによって、コンペティションのみでないすそ野が広がっていることが示された。

以上、本研究での結果を示した。この結果を先行研究に位置づけたいところだが、そもそも日本の1970年代から1980年代のサーフシーンの分析はない。日本のサーフィン史をジェンダー視点に気を配りながらさらに深めることで、欧米圏が中心のサーフィン文化史に多様性を持ち込むことが可能になるだろう。今回の成果は、サーフィン雑誌の記事に加え、5名の女性の語りが可能にした。インタビュアー自身のネットワークやサーフィン経験も役立った。

本研究の意義は、日本のサーフィン史の一部を明らかにしたということのみならず、多くの女性サーファーとその周囲の人々が、長い時間をかけてサーフィン文化を引き継ぎ、伝え、女性にとっての壁を押し広げ続けてきたということを示した点にある。変わることをないように見える現実が、実は別の可能性や生き方もあることを、私たちに伝えている。日本のサーフィンのジェンダー平等は、どこまで進み、またどこに課題があるのか、考える機会を与えてくれる。

参考文献

- Comer, K. 2010. *Surfer girls in the new world order*, Duke University Press.
 Bush, L. 2016. Creating our own lineup: identities and shared cultural norms of surfing women in a U.S. East coast community. *Journal of Contemporary Ethnography*, 45(3), 1-29.
 Henderson, M. 2001. A Shifting Line Up: men, women, and Tracks surfing magazine, *Journal of Media and Cultural Studies*, 15(3), 319-332.
 Heywood, L. 2008. Third-wave feminism, the global economy, and women's surfing: sports as stealth feminism in girls' surf culture.
 Harris, A.(ed.) *Next wave cultures: feminism, subcultures, activism*, Routledge.
 Lisahunter (ed.), *Surfing, Sex, Genders and Sexualities*, Routledge.
 Reed, R. 2010. *Waves of wahines: a history of women's surfing*, Reed Books.
 Stedman, L. 1997. From Gidget to gonad man: surfers, feminists and postmodernisation. *The Australia and New Zealand Journal of Sociology*, 33(1), 75-90.
- Wheaton, W. 2013. *The cultural politics of lifestyle sports*, Routledge. (2019、市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳、サーフィン・スケートボード・パルクール—ライフスタイルスポーツの文化と政治、ナカニシヤ出版。)
 Warshaw, M. 2005. *The encyclopedia of surfing*, Harcourt Books.
 Warshaw, M. 2010. *The history of surfing*, Chronicle Books.
- Hemmings, F. 1997. *The Soul of Surfing is Hawaiian*, Sports Enterprise, 1997, 151p. (1997. 金子ゆかり訳、『ハワイアンサーフストーリーズ』、榎出版社。)
 東理夫、1993. 『デューク・カハナモク 幻の世界記録を泳いだ男』、メディアファクトリー。
- Hill, L. 2020. *She Surf: The Rise of Female Surfing*, Gestalten.
 Amell, C. *Surf like a Girl*, Prestel.

- 5 水野英莉, 2002. 「スポーツと下位文化についての一考察——X・サーフ・ショップにみられる『男性文化』」、『京都社会学年報』10、35-60。
水野英莉, 2005. 「スポーツする日常にある性差別——サーファー・コミュニティへのフィールドワークから」、好井裕明編、『繋がりと排除の社会学』、明石書店、215-263。
水野英莉, 2005. 「女性サーファーをめぐる『スポーツ経験とジェンダー』の一考察——『男性占有』の領域における居場所の確保——」、『ソシオロジ』154、121-138。
水野英莉, 2015. 日本におけるサーフィンをする女性の50年（1）—1990年代以降のサーフィン文化とジェンダー公平—、流通科学論集—人間・社会・自然編、28(1)、53-76。
Mizuno, E. 2018. Multiple marginalization?: representation and experience of bodyboarding in Japan. Lisahunter (ed.), *Surfing, Sex, Genders and Sexualities*, Routledge.
- 6 Doring, A. 2018b. Mobilising Stoke: A Genealogy of Surf Tourism Development in Miyazaki, Japan. *Tourism Planning & Development*, 15(1), 68-81.
Doring, A. 2019. Maintaining Masculinities in Japan's Transnational Surfscapes: Space, Place, and Gender. *Journal of Sport and Social Issues*, 43(5), 386-406.
小林勝法, 2013. 「鵜沼海岸でのサーフィンの発祥前史」、『文教大学国際学部紀要』、23(2)、1-11。
小林勝法・西田亮介・松本秀夫, 2012a. 「茅ヶ崎市のサーフィン関連産業の発祥と推移（研究ノート）」、『湘南フォーラム: 文教大学湘南総合研究所紀要』、16、107-118。
小林勝法・西田亮介・松本秀夫, 2012b. 「新島におけるサーフィンによる観光誘致の経緯」、『文教大学国際学部紀要』、22(2)、13-24。
小長谷悠紀, 2005. 「日本におけるサーフィンの受容過程」、立教大学観光学部『立教大学観光学研究紀要』7、1-16。
小長谷悠紀, 2009. 「サーフィン 文化の形成と空間というメディア」、神田孝治編著『レジャーの空間—諸相とアプローチ—』、ナカニシヤ出版、59-67。
7 渡辺 2014、小森 2011 小森真樹, 2011. 「若者雑誌と1970年代日本における「アメリカナイゼーション」の変容: 『宝島』、『Made in U.S.A. catalog』、『ポパイ』、『ブルータス』を事例に」、出版研究、42、47-68。渡辺明日香, 2014. 日本のファッションにみるアメリカの影響: 洋装化、ジャパン・ファッションの影響、ストリートファッションの現在、共立女子短期大学生生活科学科紀要、57、23-36。
8 『POPEYE: the Surf Boy 1978、増刊第①集』、平凡出版、1978、114-117。
9 『SURFIN'LIFE、65号』1986、70-77。
10 武藤恒志, 2005. IRAKO CLASSIC。
近江俊哉, 2008. 『マイネーム・イズ・サーファー』、榎出版社。
柴田哲孝, 1998. 『白いサーフボード——日本で初めてサーフボードを作った男、高橋太郎の伝説』、たちばな出版。
富山英輔, 1996. 「サーファーというひとつの生き方 サーフィン教の信者たち」『サーフ・スタイル・ブック』、ワールドフォトプレス。
富山英輔, 1997. 『サーファー・真木蔵人』、榎出版社。
山森恵子, 2014. 『サーフ・レジェンド・ストーリーズ』、榎出版社
11 『SURFIN'LIFE』、23号、1982年; 24号、1982年; 26号、1982年; 29号、1983年; 30号、1983年; 65号、1986年; 66号、1986年; 67号、1986年; 68号、1986年; 71号、1986年; 75号、1986年。
12 『SURFER 別冊 HELM』、1987年新春号、91; 1987年 APRIL、140、サーファーパブリッシング。
13 『月刊ロコ』、vol4、1983年、淡路書房。
14 朝日新聞「父親不在 その2」『どうするあなたなら…』1999年4月22日朝刊・社会面も参照。